

世界の農林水産

Spring
2010

World's Agriculture, Forestry And Fisheries
FAO News No.818

特集

FAO世界食料安全保障サミット

2009年11月16-18日

Report

気候変動に農業の利点を取り入れる

——軽減・適応策と開発・食料安全保障



JAICAF ジェイカフ

03 特集

FAO世界食料安全保障サミット

2009年11月16-18日

10 Report 1

気候変動に農業の利点を取り入れる

——軽減・適応策と開発・食料安全保障

16 Report 2

都市への食料供給

21 Food Outlook 世界の食料需給見通し 2009.12

市場状況概要

26 FIVIMS 食料不安脆弱性情報地図システム

食料安全保障情報システム入門——FIVIMSを中心に

連載6（最終回）短期的食料不安分析の実例

前FAOアジア・太平洋地域事務所 チーフ・テクニカル・アドバイザー 南口 直樹

30 FOOD for ALL FAOの活動にご協力いただいている団体

南アジアと日本での活動を通じて

すべての人々の可能性が開花する社会をめざす

特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会
海外活動グループ職員 藤岡 恵美子

32 FAO 寄託図書館のご案内

33 PHOTO JOURNAL

サイクロン被害から立ち上がるデルタの農民たち

前FAO日本事務所 副代表 国安 法夫

36 FAOで活躍する日本人 no.19

FAOの情報技術を活用する

FAO Chief Information Officer (CIO) 部 プリンシパル・オフィサー 花岡 靖子

38 FAO MAP

FAOの支援を受けている都市 2004-2009年

世界の農林水産
FAO News Spring 2010
通巻818号

平成22年3月1日発行
(年4回発行)

発行
(社)国際農林業協働協会 (JAICAF)
〒107-0052
東京都港区赤坂8-10-39
赤坂KSAビル3F
Tel : 03-5772-7880
Fax : 03-5772-7680
E-mail : fao@jaicaf.or.jp
www.jaicaf.or.jp

共同編集
国際連合食糧農業機関 (FAO)
日本事務所
www.fao.or.jp
編集 : 宮道 りか、リンダ・ヤオ
(社)国際農林業協働協会
編集 : 森 麻衣子、廣瀬 ちづる

デザイン : 岩本 美奈子

本誌と月刊ニュースレター
「FAO Newsletter」は、
JAICAFの会員にお届けしています。
詳しくはJAICAFウェブサイト
をご覧ください。

R100
古紙パルプ配合率100%
再生紙を使用

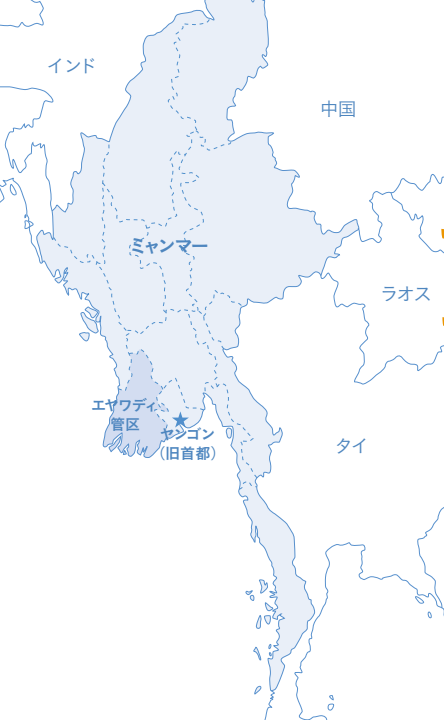


PHOTO JOURNAL

サイクロン被害から立ち上がる デルタの農民たち

前FAO日本事務所 副代表（現 農林水産省北陸農政局 整備部長） 国安 法夫



エヤワディ川から運河に入ると、気分はまさにジャングルクルーズ。水深が浅く、満潮時にしか行けない村もたくさんあるとのこと。



上：子豚は小船に載せ、運河の奥にある農村にも送り届ける。下：子豚を2頭もらったアエウ村のネーさん。5頭飼っていた豚をナルギスで失ってしまったが、この2頭から子豚が生まれ、現金収入が得られる日を心待ちにしている。



エヤワディ川の夕焼け。サイクロン「ナルギス」の被害は甚大だったが、雄大な夕焼けは健在だ。

2008年5月2日から3日にかけて、ミャンマー史上最悪のサイクロン「ナルギス」が同国南西部に位置するエヤワディ川デルタを襲いました。これにより、被災地域総人口の3分の1以上に当たる240万人に深刻な被害を与え、8万4,537人が亡くなり、5万3,000人以上が行方不明という未曾有の災害規模が報告されました。交通を船に頼りアクセスしづらいデルタ地域の被害は深刻であり、生命や家屋の被害ばかりではなく、収穫物や種子、農機具、家畜等の損失により、この穀倉地帯の農業にとって現在の生計と将来の農作業双方に対し

て甚大な影響を及ぼすことになったのです。

国連はミャンマー政府およびミャンマー赤十字社と連携し、ナルギス襲来から6日後の5月9日に1億8,700万ドルの緊急アピールを、そして被害状況や対応策がおおむね明らかになった7月10日には総額4億8,180万ドルの改定アピールを発表しました。この中でFAOは農業分野での救援・復興活動を担うことになり、日本をはじめイギリス、イタリア、オーストラリア、スウェーデン等のドナー国やパートナー機関と一緒に、農作物、家畜、漁業、



役畜であった水牛をサイクロンで失い、全量を補充できないなか、動力耕うん機がミャンマーの稲作を支え、農業近代化にもつながることが望まれる。



FAOからミャンマー政府（農業灌漑省）への耕うん機引渡し式。マウ農業機械局長（手前右）に目録を渡す今井FAOミャンマー事務所長（手前左）。

林業を通じた生計復興対策を実施しています。本稿では、筆者が2009年8月に訪れたエヤワディ川デルタの現場から、日本政府の支援によりFAOが実施している復興活動をレポートします。

2009年1月から2年間にわたり、特に被害の大きかった4県において、6月から始まる雨期作と11月からの乾期作にタイミングを合わせ、日本からの2億円の資金により種子・肥料の配布、耕作に必要な水牛・耕うん機の供与、生計向上につながる小家畜や果樹苗木の配布などが行なわれています。FAOミャンマー事務所の今井伸所長は、世界に2人しかいない日本人現場事務所長のひとりですが、2008年6月の現地着任以来、サイクロン

ン対策にフル回転とのことでした。

現地はもともと道路網のないデルタであり、旧首都ヤンゴン[※]から車で4時間のボガレ県を基地に、それから先はボートが主要な交通機関です。現地4県にFAOスタッフがいるものの、当然ながら4人だけでは対応できず、事業実施パートナーと呼ばれる13のNGOとの協働作業が欠かせません。日本に本部のあるAAR（難民を助ける会）もそのひとつであり、ミャンマー人のカインさんを中心とする若者たちが大活躍していました。

1日も早いサイクロン被害からの復興と力強い生計の回復をお祈りします。

※ 現首都はネーピードー



ミャンマーで有名な人カクシー、サイカーに乗るAARヤンゴン調整官カインさん。日本語も達者だ。



台船に乗せヤンゴンから運搬される水牛。デルタ地域の水牛はサイクロンで被害を受け、他地域にまわす余裕はない。

左：配布する肥料には、FAOロゴとともに日本のODA（政府開発援助）のロゴが印刷されている。右：ココナッツ2本、マンゴ2本、ライム1本をセットにして、1,000件の小規模農家に配布した。



家畜を配布する前に、各集落では農民による家畜銀行が作られる。そのひとつであるヤフレチャウン村の女性飼育グループで話を聞く筆者（右端）。



種子と肥料を配布するだけでなく、施肥や除草の仕方など、展示圃場を使ったトレーニングが進められている。



上：インフラの整備されていないデルタでは水道も給水車頼み。ただし洗濯などは川で行うとのこと。下：デルタの朝食は屋台のモヒンガー。コメで作られた麺に魚ベースの濁ったスープ。揚げパン、揚げソーセージ、ゆで卵などの具を細かく混ぜながら食べる。



道路網が整備されていないデルタでは、大量の早苗を運ぶのに、昔も今も河川や運河に頼っている。その様子は大蛇を操る蛇使いのようでもある。